

# 異文化コミュニケーション教育（異文化教育）の原点としての 「我々」と「彼等」のコミュニケーション問題（25）

—正義のための連帯—

青 木 順 子

‘Solidarity for Justice’ in Intercultural Communication Education

Junko AOKI

## 要 旨

本論文では、カミュの『ペスト』を基に、正義のための飛躍を可能にするような連帯の在り方について考察をしている。カミュは、苦悩は個人的なものであるが、反抗的行動が集団として意識を持つ時に万人の冒険となると述べる。個人を苦しめていた苦悩が「集団的ペスト」となり、皆の問題として人々の連帯による闘いを可能にする。「われ反抗す、ゆえにわれら在り」—不条理な社会の問題に対して、人間的な「反抗」の共感と連帯において、各自が自分にできることをして共に立ち向かうことに希望があり、それだけが、自分の正義を絶対化、正当化して他者への暴力に依るような行為に陥らず、共に「われら在り」と謳えることができる唯一の方法なのである。『ペスト』で示されている連帯は、異文化コミュニケーション教育におけるモデルの一つとなろう。

キーワード：異文化コミュニケーション教育、  
異文化教育、正義

## はじめに

「異文化コミュニケーション教育」では、共に生きる世界を構築するために「正義」を真摯に考えることで、正義に基づいて行動できる「普通の人々」が大多数となるような社会の実現に貢献し、その「普通の人々」の覚悟が少しでも可能になるような「飛躍の仕方」を探求する。前稿<sup>1)</sup>では、ヤングの提唱した「社会的繋がりモデル」を紹介し、構造上のプロセス

を通じてお互いに繋がりあっている人々が責任を分有し、責任を分有する人々がそのプロセスを変革するために集団的行動を組織化することによって正義は果たされると結論した。正義のための飛躍が必要とされる世界で、その飛躍自体は、『走れメロス』<sup>2)</sup>におけるように、必ずしも単身で王城に乗り込んだメロスの必要はないことを教えること、同時に、「王様、王様万歳」という群衆の歓声でメロスの物語は終わる必要がないことを教えること、の両方が要求されているのである。本稿では、カミュの『ペスト』<sup>3)</sup>を基に、引き続き、正義のための飛躍、さらにそれを可能にするような連帯の在り方について考察をしていく。

## 1. カミュの『ペスト』における「連帯」

1947年刊行のカミュの『ペスト』は、1940年代、ペスト菌で閉鎖され極限の状態に置かれた北アフリカの港町オランで、ペストの発生から町の開放まで、外部の世界から遮断された時期、ペストと闘う人々を描いている。異なる立場ゆえに正義への異なる考え方を持つ者達が、ペストと闘うという目的のもとに密接に関わりあっていくことになる。

物語を通して中心的人物といえるのは、ペスト感染との闘いをリードする医師のリウーである。リウーがペスト感染の状況を説明した時、彼が使っているのは「理性の言葉 (p.126)」であって、「抽象の世界にいる (p.126)」と新聞記者のランベールには批判される。それに対して、理性の言葉を話しているかどうかはにおいておいても、自分は「明白な事実の言葉 (p.126)」を話しているのだとリウーは答える。そして、「不幸ななかには抽象と非現実の一面がある。しかし、その抽象がこっちを殺しにかかって来たら、抽象だって相手にしなければならぬのだ (p.129)」とペストは抽象であると説明する。その抽象は、ランベールにとっては彼

自身の幸福とは相反するもので、リウー自身も、ランベールがある意味で正しいと知ってはいる。しかし、そうであっても、「抽象が幸福にまさる力をもつものになることがあり、その場合には、そしてその場合のみ、それを考慮に入れなければならぬ (p.133)」こともリウーはよく分かっていたのである。だからこそ、「一人一人の幸福とベストの抽象との陰鬱な戦い (p.133)」と形容される状況で、リウーは抽象であるベストとの戦いを継続するのである。

この抽象に対して理解をしようとする姿勢を「見きわめる」という言葉でリウーは表現する。神父バヌールの最初の説教を聞いた後で、神父が言うように人を開眼させるという点において、ベストにもいい効能があると考えているのか、とリウーは問われる。その時、リウーは、ベストに対して闘うべきだということは疑いのないことだと答える。

「この世の不幸というものに関して事実であることは、ベストの場合にも事実です。それはある人々を大ならしめるために役立つことがあります。しかしながら、それがもたらす悲惨と苦痛を見たら、それこそ間違いか、盲人か、卑怯者でない限り、ベストに対してあきらめるなどということはできないはず (p.183)」

続いて「神を信じているか」という問いを向けられ、リウーは信じていないと答える。自分は「暗夜のなか (p.184)」で、「なんとかしてはっきり見きわめようと努めている (p.184)」と、「見きわめる」という言葉で説明をする。そうした「見きわめる」ことを抽象に対して実践するリウーは、ベストと戦う唯一の方法は、「誠実さ (p.245)」であると言い、各自が「自分の職務を果たすこと (p.133)」なのだと言明するのである。抽象に対して「見きわめる」ことが「誠実さ」であり、そのために「自分の職務を果たす」という点で、彼の考えと行動は一貫しているのである。これは、作家のカミュが自分自身の考えとして述べているものとも一致していると考えられている。

人間にふさわしい唯一の態度はリウー医師のそれです。つまり、心の中だけで悪と妥協することを拒み、知性と心情のあらゆる手段を動員して、人間の領域から苦しみを追放するということです。<sup>4)</sup>

また、この「誠実さ」の性質については、カミュは『シーシュポスの神話』で、不条理が「人間と世界」の両方に属し、かつ「両者を結ぶ唯一の絆」であることが自分にとってはたった一つの確実なことであり、「確実さを真っ向から見据えて、それをたえず持ち続け」、その確実さに基づき行動を規制し、確実さを追いかけて、それによる帰結も受け入れて自分が生きて

いくことが「誠実な生き方」と説明している<sup>5)</sup>。

リウーのベストに対する闘いに協同して加わる人々は、リウーと同じような考えや生き方をしているわけではない。彼らはそれぞれ異なりながら、それでも同じ闘いに加わるのである。保健隊を作って共にベストと闘うことを、率先して申し出るタルーは、何がそこまで積極的な行動に向かわせるのかをリウーに聞かれた時に、「理解すること (p.192)」と即答する。小役人のグランは、ヒロイックなこととは無縁のまま、結成された保健隊で役立ちたいと肅々と丁寧に仕事をし続ける。混乱の中で、専門の人員が足りない場合は、それを引き受けて、「いつもの彼そのままの善き意志を持って、躊躇なく、『うん』と引き受け (p.197)」ていく。彼の望みは「ささやかな仕事で役立ちたい (p.197)」ということだけであり、「なすべきことだけをなそうと、律儀に努めて (p.202)」いくのである。

新聞記者のランベールは、取材に町を訪れていて封鎖に遭遇し、最初は、一刻も早く町を出てフランスにいる妻と合流をすることを望んでいるが、リウーやタルーと会って、保健隊に参加をして働くうちに、脱出を止めて町に残ることを選ぶ。その決意を告げる時、リウーは、「幸福のほうを選ぶのになにも恥じることはない (p.307)」と言うが、ランベールは、「自分一人が幸福になるということは、恥ずべきことかもしれない (p.307)」と答える。

「これまでずっと、自分はこの町には無縁の人間だ、自分には、あなたがたはなんのかかわりもないと、そう思っていました。ところが現に見たとおりのものを見てしまった今では、もう確かに僕はこの町の人間です。自分でそれを望もうと望まないと。この事件はみんなに関係のあることなんです (p.307)」

ベストと闘う彼らを連帯させていくものは、一つの絶対的な正義の真理や信条ではない。少なくともみんなにとっての正義と思えることを「みんなに関係のあること」として意識する、そして、「自分にできることをする」、「自分の仕事を果たす」、「今の自分を引き受ける」という姿勢を持つ、これが人々の連帯の必要条件として存在し、異なる人々の連帯を可能にしているのである。

## 2. 絶対的な神の真理と連帯の拒否

一方で、第1節に挙げた人々のように「連帯」の感情においては結びつくことが最後までなかった人々もいる。そのうちの一人は、宗教者である。相違がこう記される—「ある人々が抽象を見たところに、ある人々は真理の姿を見ていた (p.134)」。オランの町の指導

的宗教者であるパヌルー神父は、町の人々に向けた最初の説教で、ペストと救済は神が人々に与えた慈悲であり、この災禍が人を「高め、道を示してくれている (p.143)」と、神の与えた試練として人々がペストの災禍を受け入れるように言う。しかし、リウーはそれに対して強い反発を感じるのである。「子供たちが責めさいなまれるように作られたこんな世界を愛することなどは、死んでも肯んじません (p.322)」。このリウーの言葉に対して、パヌルーは、恩寵と呼ばれるものが今分かったと言って宗教の話に戻り、二人の会話が噛み合うことはない。そうしたパヌルーにリウーは、言葉を重ねて連帯を訴える。

「僕はそんなことをあなたと議論したいとは思いません。われわれは一緒に働いているんです。冒瀆や祈禱を超えてわれわれを結びつける何ものかのために、それだけが重要な点です (p.323)」

「あなたが望まれようと望まれないと、われわれは一緒になって、それを忍び、それと戦っているんです (p.324)」

結局、パヌルーは保健隊には加わり、病院にも姿を見せる。しかし、「冒瀆や祈禱を超え」、ただ、「一緒に働いている」「一緒になって」という言葉で示されたリウーの示唆した連帯に、行動のレベルでは加わったけれども、感情のレベルではパヌルーが加わることはなかった。宗教であれ、政治的信条であれ、唯一絶対的の真実として人が固執している限り、その真実を超えたものを認めた上での連帯はできないのである。

パヌルーの2回目の説教では、全てを信じるか、それとも全否定するか、という、さらに極端な訴えを行った。ペストによって人々を死の影に閉じ込める屈辱的な時にこそ、神は本質的な選択の苦悩に人々を誘い、信じる者はそれを甘受するべきなのであり、「子どもの苦しみは、我々の苦きパンであるが、しかしこのパンなくしては、われわれの魂はその精神的な飢えのために死滅するだろう (p.334)」と子どもの受難も引き合いに出す。そして最後には信仰の絶対的信頼を呼びかけ、「神への愛は困難な愛であります。それは自我の全面的な放棄と、わが身の蔑視を前提としております。しかし、この愛のみが、子供の苦しみと死を消し去ることができるのであり、この愛のみがともかくそれを必要なもの—理解することが不可能なるがゆえに、そしてただそれを望む以外にはなしえないがゆえに必要なもの—となしうる (p.337)」とまで言う。この説教の内容については、老司祭も戸惑うが、若い助祭はこう解釈してみせる—「司祭が医者診断を求めるとしたら、そこには矛盾がある、というのです

(p.339)」。またその話を聞いたタルーはこう説明するのである—「罪なき者が目をつぶされるとなれば、キリスト教徒は、信仰を失うか、さもなければ目をつぶされることを受け入れるかだ。パヌルーは、信仰は失いたくない。とことんまで行くつもりなのだ (p.339)」。後に、パヌルーはペストらしき病に倒れるが、最後までペストとしての治療を受けることは拒む。彼は死ぬまで信仰は保ち、信仰を持たない者との連帯は拒んだといえよう。パヌルーにとって、リウーにとっての「抽象」は理解を試みようとするものではなく、絶対的な真理として人間の存在から超越して保たれなければならないのであったのである。

もう一人、行動においても感情においてもリウー達と連帯できなかった者は、収容される寸前に勃発したペスト感染によって、一時的な自由を得た小悪人コタールである。ペスト感染の混乱状況は収監を免れたコタールにとっては都合がよいわけで、ただそれだけのためにコタールはペスト感染の状況が続くことを願う。当然のごとく、保健隊で手伝うという誘いも断る。タルーの言葉でいえば、「あの男の唯一のほんとうの罪は、子供たちや人々を死なせたところのものを、心の中で是認していたことだ。(p.448)」と断罪される人間である。

### 3. 「ペスト」・殺す行為の否定

第2節に挙げたように、ペストとの闘いに加わった理由を、彼の道徳が「理解すること」にあるからと応答したタルーは、人間を殺す行為を一切否定している人間である。「僕はこの町や今度の疫病に出くわすずっと前から、すでにペストに苦しめられていたんだ (p.363)」とリウーに打ち明ける。それを説明する過程で、若い時、次席検事の父親が法廷で死刑の判決を下すのを見て、人間が人間を逡巡なく殺す行為の認識に叩きのめされたこと、その父親は死刑執行にも立ち会っていることも分かり、堪えがたい嫌悪感に襲われたこと、その後、自分自身は政治運動へ身を投下し、その闘いを通して殺戮を防ぐことができると信じていたが、結局はその運動において再び処刑が行われるのを見ることになってしまったと一連の過去の出来事を話す。自分自身が「何千という人間の死に間接に同意していたこと、不可避的にそういう死を引き起こすものであった行為や原理を善と認めることによって、その死を挑発させていたこと (p.373)」をタルーはまさに理解するのである<sup>6)</sup>。

父親が死刑執行時にも立ち会っていることを意識して感じた、自分が絶対的に正義の側にいるという理由から人を殺すことへの嫌悪は、自らが社会の一員とし



て、死刑執行に実は加担しているという認識によってタルーをさらに激しく苦しめる。

「僕は、自分が何千という人間の死に間接に同意していたということ、不可避免的にそういう死を引き起こすものであった行為や原理を善と認めることによって、その死を挑発さえもしていたということを知った (p.372)」

タルーにとって、「ペスト」と言う言葉が指すものは、それがどんな意図であれ、死を引き起こす原理を善として認めている人間の生である。そして、「誰でもめいめい自分のうちにペストをもっている (p.376)」のである。タルーはこの「ペスト」を告発すると同時に、自分もそうした行為が平然と行われている社会では加担者として存在しているという事実の認識に苦悩したのである。リウーに「われわれはみんなペストの中にいるのだ、と。そこで僕は心の平和を失ってしまった。僕は現在もまだそれを探し求めながら、すべての人々を理解しよう、誰に対しても不倶戴天の敵にはなるまいと努めているのだ (p.375)」と説明する。「今後はもうペスト患者にならないように、なすべきことをなさねばならないのだ (p.375)」。タルーにとって、「ペスト患者」とは平然と疑いもないものとして「ペスト」を生きることであり、「ペスト患者」にならないとは、「人を死なせたり、死なせることを正当化したりする、いっさいのものを拒否 (p.376)」していこうとする生き方をすることになる。

この「ペスト患者」にならない努力は、「ペスト」を根源的に抱えている社会に生きるゆえに容易なことではない。「ずいぶん疲れることだよ。ペスト患者であるということは。しかし、ペスト患者になるまいとすることは、まだもっと疲れることだ (p.377)」。実際、私たちの歴史そのものが「ペスト患者」によって成り立っているのである。歴史は、個々人の死の問題に関わることないどころか、戦争、革命、すなわち殺人によって作り上げられている—「僕が人を殺すことを断念した瞬間から、決定的な追放に処せられたこと、を知っている。歴史を作るのはほかの連中 (p.377)」であり、「この地上には天災と犠牲者があるということ、そして、できるかぎり天災に同意することを拒否しなければならない (p.377)」と、タルーは「あらゆる場合に犠牲者の側にたつこと (p.378)」で、この世界で生きていこうとしているのである。世界に殺す者と殺される者たちがいて、自分は殺される者たちの側に必ず立つ、という決意のもとに生きるのである<sup>7)</sup>。

#### 4. 人の死への「謙譲の気持ち」と「輝き」

第3節に挙げた場面で、タルーは、ペスト患者にはならないという決意で生きる時に心の平和に達するためにどうしているのかとリウーに聞かれて、「共感 (p.379)」と答える。それを聞いたリウーは彼の共感をタルーに示す。

「僕は自分で敗北者のほうにずっと連帯感を感じるんだ、聖者なんていうものよりも。僕にはどうもヒロイズムや聖者の徳などというものを望む気持ちはないと思う。僕が心をひかれるのは、人間であるということだ (p.380)」

二人がお互いに重要と考えている生き方はここで共有される—「そうさ、僕たちは同じものを求めているんだ。しかし僕の方が野心は小さいね (p.380)」とタルーは答える。医師として人間の死に向き合っていく行動において、一貫した考えと行為を揺ぎなく示しているリウーへの尊敬が、葛藤と苦悩を生きたタルーによる「僕の方が野心は小さいね」に表わされていると感じられる。しかし、そのリウーも、タルーに彼の葛藤を伝えているのである。神を信じないのは、全能の神を信じて任せることで人々の治療を止めることはできないからで、「自分としてできるだけ彼らを守ってやる、ただそれだけ (p.186)」であると。それに対して、「何ものに対して守るのか」とタルーに問われ、分からないとリウーは答え、そして、おそらく彼自身にも納得できる答えを探して説明をしようとする。その時、リウーは過去の話を挙げ、人間の死に対しての彼の気持ちを話すのである。一人の女性が死ぬのはいやだと叫んだ、まさにその時、それに対しては「慣れっこにはなれない (p.187)」と気づき、その気持ちの理由について、後に「謙譲な気持ち (p.187)」になる、そして今でも「死ぬところを見ることには慣れっこになれない (p.187)」から、世界が死に襲われている時には全力で闘うしかないと考えている—「神が黙している天上の世界に眼を向けたりしないで (p.188)」。それを聞いて黙したタルーもまたリウーの言うところの人間の死に対していただく「謙譲な気持ち」の意味を理解していると考えられる。

タルーは、ペスト感染から町がやっと開放されそうになったまさにその時に、ペストに罹り、リウーとリウーの母親の看病を受ける。付き添うリウーの母親には「輝き (p.408)」が見えると描写されている。「彼女の善良さ (p.408)」、「考えることなく、しかしすべてを知っており、そんなにひっそりと陰にうずもれていながら、どんな光線にも、たとえペストの光線にであろうとも、りっぱに堪えることができる (p.408)」、そんな

「輝き」である。死の当日、そのリウーの母親に、タルーは「ありがとう」と言い、「今こそすべてはよいのだ (p.427)」とつぶやく。タルーが「よい」として肯定したのは、絶対的真理において他者を殺すことなく務める人間の生そのものへの肯定と解釈される。リウーの母親の形容にある「輝き」は、自分の正義を絶対視して、他者の中に敵を作り、死を科す、そうしたベスト患者には絶対ならない人間の持つ尊厳の輝きであり、そうした人間であり続けるために葛藤をしてきたタルーの言葉には、彼女のような生、自分がなろうと努めた生を含めて「今こそすべてはよいのだ」という生き方への肯定感が示されている<sup>8)</sup>。リウーの母親はまた、タルーの亡き母親の姿でもある。静かに、声高に叫ぶことなく、全てを知り、そして、「ベスト患者」にならない、そうした人々の存在と生の尊厳をあらためてタルーは死の間際に確信したのである。結局、リウー達とのベストとの闘いのための連帯は、個人の苦悩としてタルーにあった長い闘いにも連帯を与えたのである。それゆえ、タルーの言葉は死の床にあってなお、タルーの幸福感を醸し出している。

## 5. 記憶

連帯してベストと闘った仲間というだけでなく、生き方において共有し得、今後友情を育てていくことができる相手として出会えたタルーがベストのために命を失った時、リウーは、自分ができることについてこう考える。

「タルーは勝負に負けたのであった—自分でいっていたように。しかし、彼、リウーは、いったい何を勝負にかちえたであろうか？彼がかちえたところは、ただ、ベストを知ったこと、そしてそれを思い出すということ、友情を知ったこと、そしてそれを思い出すということ、愛情を知り、そしていつの日がそれを思い出すということになるということである。ベストと生とのかけにおいて、およそ人間がかちうることできたものは、それは知識と記憶であった。おそらくこれが、勝負に勝つとタルーの呼んでいたところのものなのだ！ (p.431)」

リウーは、ベストも、友情も、愛情も、忘れずに思い出す、そのこと自体が勝利なのだと考える。それゆえに、記憶を留める物語を綴ることを決心する。

「黙して語らぬ人々の仲間にはいらぬために、これらベストに襲われた人々に有利な証言を行うために、彼らに対して行われた非道と暴虐の、せめて思い出だけでも残しておくために、そして、天災のさなかで教えられること、すなわち人間のなかには軽蔑すべきものよりも賛美すべきものの方が多いということ、た

だそうであるだけいうために (p.457)」

『ベスト』の語り手はリウーであったと種明かしが最後にされて、あらためて物語で記されたことはリウーの考えたことだと分かる時、軽蔑されるものよりは賛美するものが多い人間の善への肯定感と、自らの信念が正しいという理由から人を殺す権利を自明とすることが悪であるとの考えが、明示されていることに気づく。その肯定感ゆえ「すべての人々のために語るべき (p.448)」と考えながらも、一人だけ、子どもや人々を死なせたものを是認していた者（この場合コタール）については語り得ないと記してある。ところが、乱射をしたコタールが警察官に拘束される際に抵抗して2発殴られるのを目撃したリウーには、その拳の音がつきまとう。「おそらく、罪を犯した人間のことを考えるのは、死んだ人間のことを考えるよりつらいかもしれない (p.453)」。結局、コタールもまたリウーの記憶のための語りから完全に漏れたのではないのだ。人間の尊厳が人間であるがゆえに存在するからこそ、罪人の痛みさえも考えるしかない。それがまさに人間が人間的である証である。

人間は邪悪であるよりもむしろ善良であり、そして真実のところ、そのことは問題でない。しかし、彼らは多少とも無知であり、そしてそれが美徳あるいは悪徳と呼ばれるところのものなのであって、最も救いのない悪徳とは、自らすべてを知っていると信じ、そこで自ら人を殺す権利を認めるような無知の、悪徳にほかならぬのである。(p.193)

## 6. 連帯された「反抗」

カミュは、『ベスト』刊行の6年後、1951年出版の『反抗的人間』において、正義が行使されていない不条理の社会の現実が「集団的ベスト」となる時、そこに個人ではなく連帯された「反抗」が起きると記している。そして、集団的行動であるゆえに、万人の冒険となり得るのだと。

不条理の体験では、苦悩は個人的なものである。反抗的行動がはじまると、それは集団的であるという意識を持ち、万人の冒険となる。だから、自分が異邦人であるという意識にとらえられた精神の最初の進歩は、この意識は万人とわけ合っているものだという事、人間的現実、その全体性において、自己からも世界からも引き離されている距離に悩むものだという事を認める点にある。一個人を苦しめていた病気が集団的ベストとなる。<sup>9)</sup>

メロスのような正義のための飛躍が必要とされる世界で、その飛躍自体は必ずしも単身で王城に乗り込ん

だメロスの必要はないことを教えること、同時に、「王様、王様万歳」という群衆の歓声でメロスの物語は終わる必要がないことを教えること、が要求されている、と本稿の「はじめに」に記した。普通に考えれば、メロスの正義の飛躍に批判があるとすれば、反抗の意志を示していないセリヌンティウスを巻き込んでしまったことが、メロスが単純すぎて自分勝手にも感じられる理由だろう。なぜなら、本稿で挙げたカミュが言うように、反抗はできるだけ殺人を避けるべきであり、どうしても殺人を行うとするのであれば、自らの死、犠牲者という形でのみ存在するわけで、絶対にそれは友の死であってはならないからだ。王に人質の提案をした時点で、メロスは「反抗のルール」を逸脱したのであり、それが自己中心的との批判にまで繋がるのであろう。また、あらためて「異文化コミュニケーション教育」の観点でメロスの正義について考える時、このメロスの飛躍は、王の殺害と自らの覚悟の死という形で行われ、普通の人々が正義の実現について共感と理解を通して、連帯し繋がっていき、自らの責任の共有の形で「自分にできることをする」ことで可能になる—そうした方法が試されなかった点で、異文化コミュニケーション教育の観点から批判できるのである。さらにいえば、批判しなければならないのである。カミュはこう続けている。

われわれのものである日々の苦難のなかにあつて、反抗は思考の領域における「われ思う」と同一の役割を果たす。反抗が第一の明証となるのだ。しかし、この明証は個人を孤独から引きだす。反抗は、すべての人間の上に、最初の価値を気づき上げる共通の場である。われ反抗す、ゆえにわれら在り。<sup>10)</sup>

「われ反抗す、ゆえにわれら在り」—不条理な社会の問題に対して、人間的な「反抗」の共感と連帯において、「自分にできることをする」ことをして私たちが共に立ち向かうことに意義があるのであり、それだけが一方的に自分の正義を絶対化、正当化して暴力に依るような行為に陥らず、共に「われら在り」と謳うことができる唯一の方法なのである。

## 7. 選択と覚悟

タルーの語った死刑執行の場面は、『ベスト』刊行の5年前、1943年刊行の『異邦人』でも、突然の事故死によって未完と終わった『最初の人間』でも出てくる。その『異邦人』では、ムルソーが、母親から聞いた父親の逸話となっている。人殺しの死刑執行を見に出かけた父親は、「見に行くと考えただけで」病気になるにも関わらず、結局見に行き、帰宅して、嘔

吐し続ける。ムルソーは、その話を聞いた時は父親を嫌になったのだが、死刑の処刑を待つ刑務所で、父親の反応は「当たり前」のことだったと気づくのである—「死刑執行より重大なものはない、ある意味では、それは人間にとって真に興味ある唯一のことなのだ<sup>11)</sup>」。社会に根源的に存在し、それゆえ人間には興味があること。だから、死刑執行には興味を持つ。群衆が集まるのだ。タルーの父親の場合は、非公開の処刑とも考えられるが、職務上の立場という理由で毎回躊躇いもなく早起きをして彼は立ち会う。ムルソーの父親は嫌がりながら、それでも見学に行ってしまう。そして、タルーの父親は日常をそのまま過ごす。その事実気づいたタルーの方はひどい嫌悪感に襲われ、家を出る。ムルソーの父親は嘔吐する。ムルソーは自分自身の処刑の日を前に嘔吐は当然だったと気づく。そのムルソーは、「孤独でないことを感じるために」処刑の日に「大勢の見物人が集まり、憎悪の叫び声をあげて、私を迎えること<sup>12)</sup>」がたった一つの希望だという。人間の生を断ち切るという人間の行為を見守る群衆の側の、自らは善き人間として、処刑台で殺される悪人に対して示す強い憎悪ほど、人間の不条理を見せつけるものはなく、その様を確認する時、ムルソーもまた同じ不条理の人間として孤独ではないのだ。

本稿の「はじめに」に挙げた『走れメロス』でも、死刑執行の場面が出てくる。その死刑が行われんとする刑場にメロスが入ってきた時、「群衆は、ひとりとして彼の到着に気がつかない」。セリヌンティウスが徐々に吊り上げられていく最中で、群衆の注意はそこに注がれているからである。広場が込み合っていたことは確かだ。メロスは「群衆を掻きわけ、掻きわけ」進む必要があったのだから。群衆が事の経緯を知っていたことも疑いがない。だから、「あっぱれ。ゆるせ」と声があがったのだ。彼らは、帰還を約束したメロスの登場を固く信じて待っていた可能性もある。でも、すでに処刑はメロス不在のまま施行されつつあったのである。メロスの身代わりとなった「罪なき人間」の絞首刑の進行を見つつ、群衆はそこに留まっていたのである。この群衆に自分は入るのだろうか—この問いに私達は答える必要がある。確かに、メロスの正義のための飛躍が、友を、死を賭す運命に巻き込んだことではメロスを批判できよう。単身でメロスが反抗に進もうとしたことも異文化コミュニケーション教育の観点から批判しておきたい。しかし、その前に、私たちは自分自身に問う必要がある。その刑場の群衆の中に私は入るのか、否か。罪なき人の死を、罪ある人の死も、どちらであれ、その殺人を見に行き、その後また日常に戻れる人々の中に自分が入るのだろうか。人間を断罪し殺す世界に加担せず、それゆえに社会の中で



絶えず犠牲者の側に立とうとして生き、それゆえに歴史からは徹底的に外れてしまうという、矛盾を抱え葛藤を持って生きる生—その覚悟があるのかどうか。群衆には入らず、歴史には記されず、しかし、同時に、その群衆が本当は望んでいるはずの社会の正義のために自分が生きること、を自分は選ぶのかどうか。「正義のための飛躍」を考えるためには、様々な立場に置かれた自分を想像してみる必要があるだろう。群衆の中にいるかもしれない自分、王に殺害されてしまったかもしれない自分、セリヌンティウスかもしれない自分、そして、メロスかもしれない自分、もしかすると王かもしれない自分、そもそも一体自分が誰であるのかを選べるのかどうかも含めて、自分に考えさせることが始まりである。また同じ群衆にしながら、後の日常はタルーの父親のようであるかもしれない自分、ムルソーの父親になる自分、そしてタルー、ムルソーにも。描かれた物語は違うけれど、不条理の世界の不条理な人間としては、全く同じ世界を生きている自分がある—その事実を認識した上での覚悟である。そして、実は選択そのものが不条理を免れないことも受け止め、それにも関わらず、その場において、自分は「抽象」を理解しようと「見きわめ」て、自らができることをすることで、正義の遂行のために他者と連帯をしていく行為者となるという覚悟である。

#### おわりに

『ベスト』には、「正義」とならんで「幸福」という概念が大事な人々の決断に呼応して必ず出てくる。第1節に挙げたように、ランベールは、「自分一人が幸福になるということは、恥ずべきことかもしれない」と答えて、町にとどまる。リウーは、ランベールが個人の幸福の方を選ぶことには恥じることはないと言うが、それでは、なぜリウー自身はベストと闘っているのか、幸福をあきらめているのかと彼に問われて、自分でもそれは分からないと答える。実は、私たちは、リウーの「幸福」に対しての答えを知っているのである。転地で病氣療養中の妻の死の知らせがベストから解放された直後の町に届く。でも、これは「不意打ち」ではない。数か月、ベストとの闘いの間、妻の症状悪化という個人の幸福を侵害する苦しみは続いていた。でも、リウーはそれによってベストとの闘いを一度も疎かにすることはなかった。彼もまた正義についての選択をする時に幸福について選択をしたのだ。結局、カミュが世界の不条理と正義の在り方について語る時に個人の幸福を語ることは必然だったということだろう。『異邦人』のムルソーの最後は、「これほど世界を自分に近いものと感じ、自分の兄弟のよう

に感じると、私は、自分が幸福だったし、今もなお幸福であることを悟った<sup>13)</sup>。『シーシュポスの神話』の最後でも「いまや、シーシュポスは幸福なのだ」と「幸福」について語られて終わる<sup>14)</sup>。実際、『ベスト』の最後も、また「幸福」で終わるのだ。「ベストが再びその鼠どもを呼びさまし、どこかの幸福な都市に彼らを死なせに差し向ける日が来るであろうということ」を (p.458)。

大学では米詩人の実存主義思想の考察を卒論としたが、カミュとの激しい論争が知られているサルトルの書を考察の基とした。それでも、カミュは歴史に燦然と輝く思想家であり、一度は読むべきという理由だけで読破した。その時、『ベスト』の中の一文が気になってフランス語の原作で実際はどのような文なのかを確かめられたらと思ったことを覚えている。実際にはそうすることもなく、さすがカミュだと名声に見合う作家であることを自分が確認できたという安心感を得て終わり、どの作品も再読することなく、長い月日が経った。『ベスト』を私が再読したのは、コロナ感染の広がる2020年3月、多くの人とその社会状況ゆえに『ベスト』を手にとっていた時である。私も全く同じ理由で再読した。その後は、コロナ感染の猛威が一向に収束する気配がなく世界が揺れている最中、次々とカミュの作品を再読していくことになった。何十年も前に読んだ時に持ったカミュの作品に対する印象と再読で感じたものが大きく違っていたのは、社会と人間の不条理が「コロナ禍」で前より焙り出されているためかも、年月を経て自分の社会と人間への理解が変わったためかも、または、自分が結局、大学院から専門として選んだ異文化コミュニケーション教育のためかもしれない。おそらくこれら三つ全てなのであろう。いずれにせよ、「コロナ禍」以前、「異文化コミュニケーション教育における幸福」を考えることから始めたはずの一連の論稿が自然に「正義の扱い」を考えることに移っていったことを考えると、カミュの作品を再読した今、再び「幸福」について考えてみたいと思うのである。

#### 引用文献

1. 青木順子「異文化コミュニケーション教育（異文化教育）の原点としての『我々』と『彼等』のコミュニケーション問題（24）—『異文化コミュニケーション教育』における『正義のための飛躍』」安田女子大学紀要50, 109-118, 2022)
2. 太宰治『走れメロス』新潮社 平成29年、本稿での引用は全てこの本からである。
3. カミュ、アルベルト、宮崎嶺雄（訳）『ベスト』新潮社、令和2年。本稿での引用は、この本からである。本稿の性質上、原文からの引用を示して考察をすすめる必要

があり、読みやすさを優先して、『ベスト』からの引用箇所では頁のみを記すこととしている。

4. カミュ、アルベルト「三つの会見記」『戒厳令・正義の人びと』（カミュ全集5）新潮社、1973年、p.254.
5. カミュ、アルベルト 清水徹（訳）『シーシュポスの神話』新潮社 令和2年、pp.42-43.
6. ジジエクがデリダの言葉について以下のように記していることを思い出させる。「2001年9月22日に、テオドル・アドルノ賞を受賞したデリダは、世界貿易ビルへの攻撃について発言し、『9月11日の犠牲者の方々に、無条件の同情をささげます。しかしそれでもわたしは声を大きくして語りたい。この犯罪に関して、政治的に無実な人はだれもいないはずだ』という趣旨のことを語っている。みずから他者との関係において考えるこの自己関係こそが、唯一の真の正義なのである。」（ジジエク、スラヴォイ、中山元（編）『現実の沙漠によろこ』『発言 米同時多発テロと23人の思想家たち』朝日出版社、2002、p.230）
7. 2009年2月エルサレム賞受賞時の村上春樹の受賞スピーチもまさに同じ考えを述べているといえよう。  
"Between a high, solid wall and an egg that breaks against it, I will always stand on the side of the egg. Yes, no matter how right the wall may be and how wrong the egg, I will stand with the egg. Someone else will have to decide what is right and what is wrong; perhaps time or history will decide. If there were a novelist who, for whatever reason, wrote works standing with the wall, of what value would such works be?"（スピーチ原文）「壁とそれとぶつかって壊れる卵の間では、どんな時でも卵の側に立つ、壁の側に立って書く作家の作品にどんな価値があるのか」と言う。カミュもまた、作家の役割について、同じような立場を何度も示している。1957年ノーベル文学書受賞スピーチで、「作家とはこんにち、歴史をつくる人びとに仕えることのできぬひとなのです。そうでなければ、作家はたちまち孤立し、みずからの芸術を失ってしまうでしょう。」（カミュ、アルベルト、佐藤亮一（訳）『1957年12月10日の演説』『尼僧への鎮魂歌・オルメドの騎士・ギロチン』（カミュ全集9）新潮社、1973年、p.212.）「私たちが正当化してくれるものがもしひとつだけあるとすれば、それは、語ることのできぬ人びとのために私たちの能力の許すかぎりにおいて語ることだと知らねばならないのです。現にいま苦しんでいる人びとすべてのために私たちは語らねばならないのです。」（『1957年12月14日の講演』『尼僧への鎮魂歌・オルメドの騎士・ギロチン』、p.232.）
8. 『シーシュポスの神話』の最後にも、生き方への肯定をする同じような言葉が出てくる。「かれもまた、『すべてよし』と判断しているのだ。」『シーシュポスの神話』、p.217.）
9. カミュ、アルベルト、佐藤亮一（訳）『反抗的人間』（カミュ全集6）新潮社、1973年、p.25.
10. 『反抗的人間』 p.25.
11. カミュ、アルベルト『異邦人』新潮社、令和2年、p.139.
12. 『異邦人』 p.157.
13. 『異邦人』 p.156.
14. 『シーシュポスの神話』 p.217.

コントリビューター：松岡 博信 教授  
（英語英米文学科）